

「生徒一人一人が意欲的に学び、わかる喜びを実感できる指導法の工夫」  
～ I C T の効果的な活用を通して～

熊本県熊本市立西山中学校 教諭 中山 晋

## 1 はじめに

子どもたちをとりまく環境が大きく変化する昨今、「生きる力」を身に付けさせることがこれからの教育の基本の一つになっており、文部科学省はその「生きる力」を、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」の3つの要素からなる力と位置づけている。その一つである「確かな学力」を子どもたちに保障し、「わかった、できた」という充実感を味わわせ、「もっと学びたい」という意欲をさらに喚起するために、まず指導者側が自らの指導法を見つめ直し、常に工夫改善を図る必要があることは言うまでもない。また、本年度の本校の教育努力目標は、「思いやりや、ともに支え合う心を育みながら、学びの楽しさを通して意欲的に学ぶ生徒を育成する」である。さらに、育てたい生徒像の一つには「基礎学力を身に付け、自ら意欲的に学ぶ能力を身に付けた生徒」とある。教育目標の具現化を目指し、本年度は意欲的に学ぶ生徒の育成に焦点を当て、指導法の工夫改善に重点を置いた研究を進めていきたいと考える。その際、I C T を効果的に活用することを柱の1つに据え、子どもたちの学びにどのような変容が見られるのかを検証していきたい。

## 2 研究主題について

本校では、I C T を活用する4つの視点として以下の4点を設定している。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| ①興味・関心を高めさせる。 | ②学習情報を共有化する。  |
| ③イメージ化し理解を促す。 | ④習熟度を高め定着を図る。 |

「生徒一人一人」が『わかった、できた』という充実感を味わい、『もっと学びたい』という意欲をもてる授業を作るために、I C T を活用し「意欲的な学び」「わかる喜びの実感」を追究していきたい。I C T の活用については、授業のどのような場面で、どのような教材を使うことが有効なのかを探していきたい。さらに生徒の理解内容が単に「イメージ化した理解」とどまらず、人人の暮らしや営みを伴った理解にまで深められるように実践を進めていきたい。

また、熊中社研では「確かな学びを育む社会科学習～イメージ形成の観点からの授業づくり～」を研究主題として研究活動を進めている。その中で、「確かな学び」とは

生徒一人一人が意欲的に学習に取り組み、 <u>社会的事象へのイメージを描き</u> 、イメージを高めながら、 <u>生徒一人一人</u> が社会認識と社会的資質（社会性・公共性）を確実に身に付けることができる学習
--

と位置付けている。

本研究では「生徒一人一人」「イメージ形成」をキーワードにI C T を活用した社会科授業実践を行うこととした。

### 3 研究の仮説

#### 仮説 1

I C Tを活用した教材を工夫することで、生徒の興味・関心が高まり、「生徒一人一人」が意欲的に学ぶことができ、確かな学びに結びつくのではないか。

#### 仮説 2

学習の過程において I C Tを有効に活用することで、「社会的事象へのイメージ形成」が図られ、わかる授業を作ることができるのではないか。

### 4 研究の方法

#### (1) 生徒一人一人が学ぶ

熊本市教育センターでは生徒一人一人を大切にす授業の創造と指導の工夫を図るため「熊本モデル」を提唱している。その中で「熊本モデル」における社会の授業では、子ども一人一人が確実な社会認識の形成を図るとともに子どもの社会的事象に対する興味・関心を尊重し、積極的な調査活動や話し合い活動を保障することによる公民的資質の育成を目的とした社会科学習を提案している。

本研究では、一部の生徒だけが活動して終わる授業ではなく、すべての生徒が意欲的に学習活動を展開するために、I C Tを活用した教材を使い、生徒の興味関心を高め、外発的な意欲の高まりが、作業や話し合い活動を通して、内発的な意欲の高まりに転移することで生徒の学習内容の定着を図るものとする。そのために、I C Tを活用した教材をからめた作業活動や話し合い活動を授業の中に設定する。

#### (2) 社会的事象へのイメージ形成

生徒が思い描く既存のイメージや固定の観念は、生徒の生活環境や学習経験、個人の能力などによりそれぞれが異なっている。その個々のイメージが、授業の中の学習活動一つ一つを経ることで、単純で表面上の理解から、人々の暮らしや営みを伴った理解へと高まりながら変化し、ある一定の方向へ収束していくことをめざしている。

本研究では、I C Tを活用し、視覚的に提示した教材や資料から社会的事象に対するイメージを膨らませ、イメージ形成を通して一人一人に確かな学力を身に付けさせるために、学習で獲得した知識や理解を通して、何らかの形で自分の考えを持ち、表現する場を設定するものとする。

#### (3) I C Tの活用

パソコンやプロジェクターを使用した授業は近年急速に進んでいる。また、I C T関連の教材開発の研究も同様である。しかし、未だにI C T機器の不足や専用の教室などハード的な課題や授業者の得意不得意の課題などがあるのも事実である。

本研究では、地形図や統計資料などの様々な資料を活用して社会的事象を多角的・多面的に考察し、判断したり、地域の規模に応じて環境条件や人間の営みと関連付けて、地域的特色や地域の課題をとらえさせることなど、社会科の地理的分野の特性を最大限に生かすため、地形図やグラフの拡大縮小や着色、また、動画の再生スピードを変化させたり、画像を編集処理するなど、I C Tを活用し、従来の板書やフラッシュカードなどとの違いを明らかにする場面を多く設定するものとする。また、生徒が授業において教材資料を一方的に受け取るだけにとどまらず、自分たちの作業内容を共有するための提示手段としてもI C Tを活用するものとする。

## 5 研究の実際

### 検証授業1

(1) 題材「日本のすがたとさまざまな地域 ～日本の略地図をえがいてみよう～」

(東京書籍 新しい社会 地理 p 4 2～p 4 3)

【学習指導要領地理的分野 2 内容 (1) 世界と日本の地域構成

イ日本の地域構成 (イ) 都道府県の構成と地域区分】

(2) 授業の流れ

- ① 世界略地図テストを行う。
- ② 日本の略地図を何も見ないで描く。
- ③ 日本の略地図を描く際のポイントを探る。
  - ア 班の中からうまく描けた略地図を選び、デジカメで取り込む。
  - イ 選んだ理由を話し合い、シートに記入し、デジカメで取り込んだ略地図をスクリーンに映し発表する。
  - ウ 発表した内容が、略地図作成上のポイントであることに気づく。
- ④ ポイントを意識しながら日本の略地図を描く。
  - ア 略地図作成上のポイントを確認する。
  - イ ポイントを意識しながら日本地図を見る。略地図のアニメーションを見る。
  - ウ 何も見ないで再び略地図を描く。
- ⑤ 教科書を見ながら日本の略地図を描き、本時の授業のまとめをする。
  - ア アニメーションを見ながら確認する。
  - イ 教科書を見ながら描く。
- ⑥ 略地図に大陸(朝鮮半島)を書き込み、南北を逆にして東アジアを眺める。

### 検証授業2

(1) 題材「身近な地域の調査」(東京書籍 新しい社会 地理 p 4 5～p 6 4)

【学習指導要領地理的分野 2 内容 (2) 地域の規模に応じた調査 ア身近な地域】

(2) 授業の流れ

- ① 前時までの復習をする。
  - ア 身近な地域についての初発のイメージを確認する。
  - イ 熊本市, 一新校区, 城西校区の人口の変化について確認する。
- ② 地形図や航空写真から人口の変化の理由を考える。
  - ア 熊本市の人口が増加し続けている理由を地形図から考える。
  - イ 一新校区の人口が途中増加に転じた理由を地形図や航空写真から考える。
  - ウ 城西校区の人口が増加し続けていない理由を地形図から考える。
- ③ 本時のまとめをする
  - ア 人口の変化の理由について確認する。
  - イ 本時の学習を踏まえて, 身近な地域についてどのような特徴があるのかを考える。

## 6 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

#### ①仮説1から

- ア 略地図を描く際のポイントを視覚的に提示することで、生徒はイメージしやすくなり、正確な略地図を描けるようになった。
- イ 地図資料を視覚的に提示することで、生徒の興味・関心を喚起させ、意欲的な学習活動に結びつけることができた。
- ウ グラフや表を提示することで生徒一人一人が課題を共有することができた。折れ線グラフが示すものを理解し、学習課題へアプローチする過程がスムーズに行うことができた。
- エ フラッシュカードや広用紙などの静止画像と異なり、画像が動くこと、拡大縮小がその場でできること、着色やマーカーライン、消去などが容易であることなどICTならではの特性を生かした授業が創造できる

#### ②仮説2から

- ア 学習が遅れがちな生徒についても、アニメーションを使用することで、ポイントを捉えやすくすることができた。このような生徒の支援の手段としても今後活用が期待される。
- イ 生徒の描いた略地図をスクリーンに提示することで、学習課題や内容を一人一人が把握でき、略地図を描く際のポイントについて、全員で考える機会を作ることができた。生徒の発表内容を共有することは、「意欲的な学び」「わかる喜びの実感」に結び付くものであった。
- ウ 地形図のどこを見てよいかわからない生徒に対して、スクリーンでの拡大表示は生徒の学習を補助することができた。
- エ 身近な校区についてのイメージが、授業前と授業後では変化した生徒が多く見られ、人口の資料や地形図から地域の特色を新たにつかむことができた。また、生徒自身も自分のイメージが変化していることを実感することができた。

### (2) 今後の課題

- ① ICTを活用して、教材や資料を視覚的に提示することにより生徒の意欲・関心は高まるが、意欲・関心の質については一考の余地がある。ただ単に画像が提示されただけでの「オー」という生徒の反応だけでは意欲・関心の継続にはつながらない。生徒の学びにつながる教材や資料の提示方法を考える必要がある。
- ② ICTの活用により生徒のイメージ形成に有効ではあるが、それは視覚的なイメージでしかない。社会的事象へのイメージ形成は「人々の暮らしが見える」ものまで深められなければならない。そのためには生徒の初発のイメージをしっかりと分析し、生徒がそのようにイメージする由来がどこにあるのかを十分把握しておくことが必要である。初発のイメージの根拠に基づいた教材提示や課題設定を設けることで、生徒のイメージがより深められるものと考えられる。
- ③ 本研究では生徒のイメージ形成についてICTを活用した視覚的な面から「わかる喜びを実感できる授業」を試みたが、「社会的事象へのイメージ形成」の過程をどのように捉え、評価すべきなのかについても研究が必要である。  
授業前にはどの生徒も個々のイメージを持っているが、その高まりや深まりは個人差が大きく、一斉授業の中で手立てによる成果の違いが見られた。